

ゲーテ 『若きヴェルターの悩み』 試論

やま と てる やす
山 戸 照 靖

大阪教育大学外国語教室

(平成4年8月28日 受付)

本年7、8月に柏原市の委嘱を受け、「世界文学散歩」という総表題のもと、「大阪教育大学市民公開講座」の5つの講演が行われた。本稿は7月11日、柏原市民文化ホールで行った講演に多少手を加えたものである。

明治時代の初め、ゲーテの『若きヴェルターの悩み』はカッセル文庫の英語訳でよく読まれ、日本語への翻訳もそれからの重訳が先ず何回か試みられた。ドイツ語のテキストから翻訳されたのは、やや後のことである。本稿では、先ず日本のこの時期におけるこの小説の翻訳の歴史と、この小説がどのように受け入れられたかを調査した。後半の二章では、ゲーテの恋愛体験と創作のはざまを埋める試みをし、更にこの小説における自殺のテーマや、自然観の特性にも触れて、この作品が現在に至るまで史上有数の読者を獲得してきた理由について考えてみた。

第1章 ゲーテの『若きヴェルターの悩み』翻訳前史と明治初期の文学風土

鴎外が4年に及ぶドイツ留学を終え、やがて『しがらみ草紙』を拠点として、新聞雑誌に華々しい文学活動を開始する明治20年代においては、まだゲーテの知名度はまことに心細い限りで、次の様な事実がこの間の事情をよく物語っているように思われる¹⁾。明治24年3月号の『国民之友』第8巻に内田遠湖の『文界漫渉』なる随想が載ったが、その中の一文に「ゲーテ氏の絶筆」は「四辺を環顧すれば寥々として声なし、而して我が心霊の静も亦復た是の如し」に始まり、「愛すべき映像よロッセ余は之を汝に還す而して汝之を敬重せん事を願う余は此の上に幾千回の接吻を印記したり余は外出し或いは家に帰る毎に此れに対して敬礼を表したり」最後は「寺院の庭内原野に向かひたる一隅の背に二株の菩提樹立つあり余の彼処に休息せん事を願うなり(ゲーテ氏書簡)」と結んでいて、ご丁寧に後注として「遠湖子日く」をつけ加え、死に際して従容迫らざる態度についてゲーテの人物を褒めている。「ゲーテ氏書簡」とあるのは、『若きヴェルターの悩み』に出ているヴェルターのロッセに宛てた最後の手紙から引かれたものであって、『日本人』と肩を並べて当代を代表する有数の評論機関誌『国民之友』(明治20年創刊)誌上にフィクションと作者の伝記的事実とを混同した記事が、堂々とまかり通っていたのである。

『ヴェルター』の翻訳そのものは英語からの抄訳ながら既に明治22年に初めて出ている²⁾。雑誌『新小説』の外編「同好随筆」欄に『旧小説』と題して第一部の7月の手紙4通だけだが、訳者中井錦城の名で出た。明治の初め頃既に輸入されていた小型ポケット本 Cassells National Library の The Sorrows of Werter (1802年英訳)からの重訳である。その二箇月後の『国民之友』第66号に「拏破崙が輿中ノ書」と題し、「森林太郎」の署名で掲載され、後『かげ草』に収められた時は、「少年エルテルの憂」³⁾と改題されている。

拿破崙の埃及を征するや、その輿中に一卷の小説ありき。即是れギョオテが少年エルテルの憂なり。この一篇は實に一たび全歐を驚かしたり。奈何といふに彼遂げ難き苦とは、当時の人皆これを懷きしを独りギョオテが能く写し出したればなり。

『ヴェルター』の簡にして要をえたこの解説に引き続いて、鴉外は更に次のように述べている。

嗚呼、エルテル出て天下ギョオテあるを知れり。而して此より後数年の間は、天下復エルテルの外にギョオテあるを知らざりき。此書もと外使の書記エルサレムが自殺の實蹟に就いて思を構ふ。その趣未だ必ずしも斬新ならず。評者或は云く。若し仏のドユマをしてこれを読ましめば、その落想の簡朴なるに呆れて、將に云ふ所を知らざらんとすと。その妙は特に行文の流麗に在り。凡そ韻語に非ずして音調の整へること、此書の如きは独逸大家の集中、復其儔を見ずと云へり。

然ればこの書を翻訳することの易事に非ざるや、知るべきのみ。故に余は頃日某氏の旧小説を読み、訳者が能くこの高遠なる文境に歩を着けしを感歎せり。憾むらくはエルテルの英訳は、世上既に其誤多きを議するもの多きに、某氏の重訳は又た専らこれに依れり。その原作と出入あるは、固より怪むに足らざるなり。余是に於いてや技癢自ら止まず、試に其七月十六日の一柬を訳す。文は一にギョオテの原作に依り、敢えて一字を増損せず。窃に自らその過謬なきを期す。唯々音調に至りては則ち全く之を失へり。

この説明でわかるように、錦城訳と対比するべく、以下鴉外はこの唯一日の手紙を訳しているだけで、主眼は某氏の誤りを指摘することに置かれているようである。旧派に属する錦城氏がかつて鴉外の文体を模倣して、「嗚呼たまらぬ。こんな医者。こんな薙医者に掛っては云々」と誹謗したことに対する意趣返しが、この一文には含まれていたのである。鴉外の訳筆はこの書簡以外には及んでいない。明治24年、第二高等学校の学生高山樗牛もまた「カッセル国民文庫」からの重訳で、『淮亭郎の悲哀』と題して、二箇月余り山形日報に連載した。第一部の手紙の内、10通が欠け、第二部は3分の1くらいに圧縮されてはいるが、これがこの小説が日本でまとまった形で紹介された最初のものである。

原作からの翻訳の最初は緑堂野史（誉田肇）の『わかきエルテルがわずらひ』で、明治26年9月から翌年8月まで『しがらみ草紙』に出ていた。日清戦争が始まり、第二軍兵站軍医部長として鴉外が出征したためにこれが廃刊になり、連載も中断されている。この翻訳の挙はドイツの諸新聞にまで報じられた様である。しかし訳者については、連載されたのが『しがらみ草紙』であったので森訳と誤認され、Prof. Mariと誤記され、ついには「大学教授」にまでさせられるといった調子で、「誤に誤を重ね」た模様である⁴⁾。

量的には樗牛のものより少なかったが、載ったメディアが地方新聞と中央の文芸雑誌の差もあり、鴉外の『即興詩人』と併載された相乗効果のおかげもあって、このドイツ語原典からの翻訳は文芸愛好者のより広範な圏内に深く浸透したようである。

『若きヴェルターの悩み』は、明治37年に至って、東大漢文出身の久保天随（得二）を待って初めて原典の完訳がなり、以後大正3年の秦豊吉『若きヴェルテルの悩み』（新潮社）をはじめ、幾多の訳者を得て現在に至るまで、感受性に富み、常に悩み多く、社会の重圧に苦しみ青年の心を捕らえ続けている。

日本人と『若きヴェルターの悩み』との接触は以上の翻訳前史からわかるように明治20年代にはじまる。江戸の戯作は明治10年代には命脈つき、既に人々は新しい時代の声を盛

る器を求めるようになっていた。その新しい文学を模索する中でさしあたり人々の飢を充たしたのが翻訳文学であった⁵⁾。明治11年に出的イギリスの政治家リットン卿の原作『アーネスト・マルトラヴァース』を丹羽純一郎が抄訳した『花柳春話』、ジュール・ヴェルヌの『80日間世界一周』（川島忠之助訳）を始めとして、いわゆるベルン物と称せられた科学小説などの流行が見られる。

スコットの『ランマームーアの花嫁』が『春風情話』（明治12年）として坪内逍遙によって訳され、井上勤はチャールズ・ラムの物語に基づくシェイクスピアの『ヴェニスの商人』を『人肉質入裁判』として紹介、あるいは『魯敏遜漂流記』を訳出、シェイクスピア原作『ジュリアス・シーザー』が逍遙によって『自由太刀餘波鋭鋒』（じゅうのたちなごりのきれあじ）として紹介（明治17年）される等、欧化万能の鹿鳴館時代を背景に次々と続く。

これらの翻訳文学がこれまでの日本の文学の趣向を徐々に変えてゆくのは自然の勢いであった。そのような流れに位置づけてみると、従来の草双紙や滑稽本や、馬琴などの儒教に基づく勧善懲悪を目指す空想的な物語の類を一掃せんとする、西欧近代のリアリズムを指向する逍遙の『小説神髓』（明治8年）は、よく時代の帰趨を示している。翻訳の果たした役割は、詩の分野でも著しいものがあつた。明治15年の外山、矢田部、井上の三博士による『新体詩抄』が歴史的には有名だが、作品そのものが低調幼稚の域を脱せず、後に島崎藤村によって書かれた山村暮鳥『三人の処女』⁶⁾の序によれば、「新体詩人」なる名称は「実に忌まわしき嘲笑を意味し、堪えがたきほどの侮蔑を意味した」のである。

20年代、新帰朝の森鷗外の目覚ましい活躍が始まる。鷗外を中心とする「SSS」（新声社）の『於母影』（22年『国民之友』の春秋二季特別付録）は、バイロンの「いねよかし」、マンフレット」やゲテの「ミニヨン」、ハイネの「あまおとめ」、シェイクスピアの「オフエリア」等の流麗、典雅な筆致による異国の清新な響きの詩風は、明治の詩壇を大きく深く驚かした。その『於母影』の多くの名詩から、西欧のポエジーの何たるかを感じ得た『文学界』（明治26-31年）の同人はそれぞれの詩の翼を羽ばたかせると同時に、鷗外の『しがらみ草紙』にも熱中した。この雑誌は文学評論を建前としながら、レッシングの『エミリア・ガロッティ』の翻訳『折薔薇』や、チェコ出身の女性作家シュビンの『埋木』、アンデルセンの『即興詩人』、『うたかたの記』といった鷗外の翻訳や創作も載っていたのである。中でも明治25年に稿を起こし、明治34年1月に完成する『即興詩人』は、『しがらみ草紙』の38号（明治25年11月）から59号にわたって連載され、鷗外が戦陣に加わったため廃刊されてからは、『めざまし草』の14巻（明治30年2月）以降に引き継がれ、明治34年2月に完結する。官途における失意の小倉時代、それ以前から始まっていた、並ぶ者なき文壇の王者としての鷗外を脅かす樗牛や上田敏の活躍等に際会して、自分の時代はもう終わったのではないかという思いを、『即興詩人』後半の主人公の失意と落魄にのりうつすことが出来た鷗外は、翌明治35年9月上下二巻にして世に問うた。

明治の20年代から30年代の前半にかけて、即ち『即興詩人』の雑誌連載と時を同じくして、澎湃としてロマン主義の時代がやってくる。『文学界』や『明星』といった詩歌・評論を中心に展開したロマン主義は、個人主義、自由主義思想の発展に伴い、封建制からの自我の解放、確立を目指すと共に、空想的・唯美的芸術をも志向した。透谷、樗牛、藤村、晚翠、鉄幹、晶子、鏡花、独歩らを代表とする、この明治の青春期の文芸運動に及ぼした鷗外訳本『即興詩人』の広く且つ深い影響については、調査が行き届いている⁷⁾。

『しがらみ草紙』に『即興詩人』と併載された緑堂野史の『わかきエルテルがわずらひ』もこのロマン主義の興隆に与かって力あったことはよく知られている。所謂「ヴェルター熱」

の急激な上昇である。

儒教倫理の強い影響のもとに、男女関係を常にいかがわしいものとみる明治初期の風土の中で、人生における「恋愛の意義」を強調する熱血漢北村透谷は、「恋愛は人生の秘鑰なり。恋愛ありて後人生あり。恋愛を抽き去りたらむには、人生は何の色味かあらむ」と高らかに叫んだ。また島崎藤村の処女作『若菜集』は、いいなずけのもとに去ってしまった恋人とその死という体験を背後に持っていたのである。『文学界』15号に載った平田禿木によるキーツの恋文三通の抄訳『薄命記』の裏にも、『文学界』同人星野天知の妹への思いが込められていた。

自我の解放という近代の理想を追い求める『文学界』同人たちが、封建的因習の厚い壁の前に佇む時に、同じ様な悩みで自殺をする若きヴェルターの様子は、或る意味で彼らの似姿と写るのも極めて自然なことであった。

例えば藤村が明治28年『文学界』5号に載せ、後に『一葉集』に収められた「友に寄するの書」では、

あゝエルテル、汝は新しき世界を歌へる天才として千古の詩人にはぐくまれたれど、猶独逸の男性の粹の粹なることを失はざるにあらずや、然らば直ちにこれ日本の男性なりというべき特性特色の、かのヘルマン、マイステルと異なれるところはいづれぞ。この胸中日本の純粹なる思想を宿せりと言ひ得べき男性は吾人これをいかなる処に学ぶべきや。あシャーロット、汝は青春年少の詩人の心に映じたれど、深くも『ライン』河畔にさくべき花の色を宿せるに非ずや。夕顔か、小春か、梅川か、重の井か、お夏か、直ちにこれ日本の女性なりといふべき特色の、ビーナス、ビートライス、マーガレットと異れるところはいづれぞ・・・⁸⁾

といった熱中ぶりを示す文章や、次の馬場孤蝶の回想にもヴェルターをめぐる『文学界』同人の様子がよく窺われる。

皆三十には四五年は間があらうかという年齢の者が多かったので、あの『エルテルの悲み』の心の底から直ちに泉み出て来るやうな感情、十分に熱烈な言語、さういふところにすっかり魅せられてしまったかの観があった。

僕等はカッセルの英訳本を引張り紙鷲のやうにして読んだ。最初によんだ者が、諸所へ赤鉛筆でもって、アンダラインを引いて置くと、その次ぎの者は、前の者の線を引かなかった部分へ、赤で線を引くといふ風で、本は瞬く間に、殆ど何の頁もが真ッ赤になったくらいであった。僕等は『エルテルの悲み』をば、文学としてより以上の興味を以って貪り読んだと云っていいであらう。（『エルテルを食読みし頃』『世界文学』月報第6号・昭和2年9月 新潮社）

これらの言葉は、佐藤春夫が後に『近代文学の展望』の中でこの「ヴェルター熱」について次の様に記述しているのに符号している。

ゲーテではやはりウェルテルが最も広く読まれ影響するところも多かったのではあるまいか。いったいウェルテルの悲哀は青春の憂鬱の発見とも云ふべき書物で青年ならば何人にも面白い作品だから文学界の人々がバイロニズムかウェルテリズムかとまで血の道を上げ、その好んで書いた美文と称する散文詩体の小品文なども所詮はすべてウェルテリズムを近松の水で割ったやうなものではあるまいか⁹⁾。

ロマン主義文学の呼び声が衰えだした頃に、久保天随のドイツ語からの『ヴェルター』の翻訳が出版された。近代文学の進むべき方向は、『小説神髓』によって示唆されていたが、

その写実主義にゾラ流の遺伝や環境を重視する自然主義が主勢力をなさんとしていた頃である。丁度時を同じくして『ファウスト』の高橋五郎訳が出ている。当時25才で、読売の社員をしていた正宗白鳥が『ゲーテ』と題して読売紙上に一文を寄せている¹⁰⁾。自然主義作家として反ロマン主義、反理想主義で、人生を虚無的に描いた作品の多い人物にふさわしい文章である。

ゲーテの作中で日本の文学者や学生間に最も其名を知られている者は、ヴェルテルとファウストとであろう。ファウストは彼が畢生の大作だといふ西洋人の評判により、一も二もなく珍重せられ、ヴェルテルは青年時代の煩悶失恋の苦痛を写したとかいふので一部の読書家の虎の巻となったのである。

これが書き出しの部分であるが、次第に世人がこれらの作名を名声につつま、天上界にまで祭り上げることに對する天の邪鬼振りを發揮して、

吾人が此等二書について耳にした丈でも大層な者で、ダンテやシェークスピアと肩を並べて、ゲーテは天下幾億万の人間の持囃す大人気役者である。彼れは其程尊いのであるか。其の作は其程にたの幾千万の詩歌小説を圧して卓越してゐるのであらうか。吾人は甚だ了解に苦しむ。

ヴェルテルは一青年が友人の女房に惚れて、どうかして思いを遂げたいと思ったが、意気地がなくて決行し得ず、さればとて男らしく思切られもせず、浮世はいやだいやだで遂にピストルで自殺したという話。まるで新聞の三面種である。叙述は少々巧であつて俸給が少なくてよければ、ゲーテという男を新聞記者に聘して艶種を書かせたり、花柳だよりの主任にしたいような気がするが、彼れを日本の大小説家紅葉や一葉に比べて、文章が上手だとも着想が巧みだとは信ぜられない。

云々と少々脱線気味で、果ては

元來釈迦も孔子も基督もシェークスピアもダンテも我々と同じく空氣を吸い物を食わねば生きてゐられぬ、畢竟世界に湧いた蛆虫さ。そんな優劣があらう筈がない。大天才とか大聖人とか神仏のやうにいふのは大間違で、自からさう思つてゐれば、余程お目出度のだし、外から持ち上げる者も誇大妄想狂の患者であらうよ。

と好き放題なこともいっているが、このあたりが、白鳥の真骨頂であり本音のように思われる。

以上が日本における『ヴェルター』受容の初期の様相であるが、この作品が明治初期のロマンチズムを盛り上げた役割はともかく、恋愛観の彼我の相違や、過度の理想化、或いは逆にそれへの反発に力点が置かれていて、文学作品としての客観的な見方にやや欠ける所があったようである。

第2章 恋愛体験と創作のはざま

この小説の素材が作者の三つの主要な体験からなっていることは周知の通りである。その一つはゲーテの1772年5月中旬から9月にかけての恋愛体験を中心とするヴェツラールでの生活、更にシャルロッテ・ブフ及びケストナーとの友情であり、その二は、同年10月のイエルーザレムの自殺事件である。最後はマクシミリアーネ・ブレンターノへの思いである。そういった伝記的資料は、ゲーテの自伝『詩と眞実』第三部の記述や残された書簡等の研究によってこれまで十分に精査されている。そういったものを読めば読むほどゲーテが現実に

見たり聞いたりした事実をこの作品に利用しつくしたかがわかる。そしてこの作品が、1774年秋の書籍市をめざしてライブチヒのヴァイガント書店から刊行されるや、ゲーテの世界的名声が一気に確立され、あらゆる言葉に翻訳され、時代で最もよく読まれる作家となる。しかしこのことは、作者ゲーテの言葉を借りるならば、「これほど突然に、これほど大胆に登場したこの風変わりな若い作者のことを誰もが知ろうとしたことは、最大の幸福だったとも、最大の不幸だったともいえる」(10-649)のである。幸福はともかく最大の不幸というのも「ところが、作者はそれだけ純粋な作品を生み出すのには好都合な静寂、薄明、暗闇から、白昼の喧騒のなかにひっぱり出されてしまった」(同ページ)からである。しかも「作者と読者の間は巨大な深淵で隔てられていること」(10-648)をいやという程体験させられるのである。モデルにされて様々な迷惑を受けて立腹したケストナー夫妻、とりわけ初版では現行の87年の改訂版とはちがひ、結婚した妻のロッテに対する態度をヴェルターに批判され、「編者」にまでヴェルターの肩を持たれたケストナーのもっともな抗議もあったが、友人達も含め一般読者の関心はもっぱら素材に集中する。『詩と真実』の言葉を借りれば、

いったいあのなかのどこが事実なのかをだれもがぜひとも知ろうとしたのであった。これには私もひどく腹をたてて、たいていはずいぶんそっけない返事をしておいた。なぜならば、このような質問に答えるということは、あれほど長いあいだ熟考を重ね、あれほどさまざまな要素に詩的統一をあたえようとした私の小品をふたたびばらばらにむしり取り、その形式を破壊することにならざるをえないし、それによって本物の構成要素そのもののさえが、破壊されないまでも少なくとも分離され、ばらばらにされてしまうことになるからである。とはいっても子細に考察してみると、一般読者のこうした要求もあながち悪くともすることはできなかった。(10-647)

『ヴィルヘルム・マイスター』や『ファウスト』を出してもなお、一般読者にとっては『ヴェルター』の作者とみなされていたゲーテは、生涯の間、こういったわずらわしい詮索につきまといわれたあげく、60代半ばになって『詩と真実』の12章、13章で可能な限りこれに答えようとしている。

そこでは、イエルーザレムの経歴やその不幸な恋愛のいきさつ、自殺事件の正確で詳細な記述を手に入れたこと、ロッテの姿を作り上げるに当たって、主要な特質は最愛の人から採ったけれども、数人の美人を研究してヴィーナス像を作り上げた芸術家のひそみにならって、数人の美少女たちの容姿と性質を参考にしながらやってみたこと、勿論そのために、詮索好きな読者は、様々な女性たちがロッテと似ていることを発見出来たし、女性たちにしても、自分が本当のロッテと見なされることに無関心ではいられなかったことなどが記されている。しかしこうした何人ものロッテのために、果てしもなく悩まされたいきさつを語ることによって、ゲーテはただ内容と素材にのみ関心を寄せる読者に答えると共に、一つの芸術作品がどのように作られるか、如何に芸術家が意識的に芸術作品として計算しつくして組み立てていくものであるかを示すことによって、芸術の世界へ読者を案内してゆこうとしているように思われる。

一方ゲーテは確かに「このような状況のもとで長い間あれこれひそかに準備を重ねたのちに、私はあらかじめ全体の構想とか、ある部分の取扱いとかを紙に書きとめておいたりせずに『ヴェルテル』を四週間のうちに書きあげた」(10-642)と書き記している。シュタイガーもまたこの部分を次のようにパラフレーズしている。

なるほど彼は初期のすべての作品と同様に、『ヴェルター』を何らの図式もなく想を練ったり、プランを厳密に立てることなく書き下ろした。だがここでもまた、詩の場合と同じように、ひそかに用意された堅固な土台を持った不動の精神が、ゲーテ自身にもまだ隠された形で働いているのである。そしてこの精神こそ彼をシュトゥルム・ウント・ドラングのすべての仲間たちから分かっているのである。だからゲーテが後年、1780年に、さらに覚めた意識で、出版以来初めて『ヴェルター』を読み返し「私は不思議に思った」と語ったのは、構成の無意識の完璧さが彼自身にも不思議に思われたからだろう。ヴェルターの性格が次第次第に露わにされてゆく様、ロッテが初めて姿を現すとき、結末を暗示する伏線、魂がおもむろに死の杯を乾しつつある一方で、躊躇しているかに見える運命、ロッテともう一度会った後、急転直下進行する破滅、<枢の釘を打つハンマーのように>という結びの、簡潔で硬質な文章、これらすべては完全に所を得、時間の尺度と情熱の度において、自然の法則にもかなっている。それゆえ一切は全体として真実の姿でわれわれに肉薄する。と同時にまたそれは美しい絵としてそれ自身だけで存在しているようにも見えるのである。(下線は筆者)¹¹⁾

ゲーテが自ら『ヴェルター』という作品全体を見て、「不思議に思った」という1780年4月30日の日記の記述に対して、シュタイガーが下した推論の基礎となった認識、即ち「ひそかに用意された堅固な土台を持った不動の精神」は、どこから生まれたのであろうか。それは芸術的課題以外のものは、全く眼中になかったものの、まだ何をしたいのかわからないといった状態にあった若きゲーテとヘルダーとの出会いに求めることが出来るようである。シュトラースブルクでのこの出会いについては、ゲーテ自身が特筆すべき事件として、『詩と真実』第10章で詳しく語っている。

この(眼疾の)治療の期間中ずっと、私は朝夕にヘルダーを見舞った。それにまた終日彼のもとにとどまって、素晴らしい偉大な彼の特性、該博な知識、深い識見を日ごとにますます評価するようになるにつれて、一方ではまもなく彼の叱責や非難にもいっそう慣れていった。この善意の不平家の影響は大きく、いちじるしいものがあった。(10-444)

シェイクスピア、オシアン、ゴールドスミス、スウィフト、スターンといった英文学の世界、ホメロス、ピンダロスといった古典古代、聖書、エッダや民謡の世界に、ゲーテは導き入れられ、新しい時代の文学観に大きな感化を受ける。1771年春にシュトラースブルクを去ったヘルダーに宛てて、その秋に出した書簡には「僕はあなたを放しません。あなたを放しはしません。ヤコブは主の天使と取っ組みあいをしました。そのためにたとえ僕が足なえになったとしても!」(18-168)と、ヘルダーが祝福を与えてくれるまではどこまでもしっかりと捕らえて離さない意志を明らかにしている。

1772年5月、父の考えに従って高等法院で法律の見習いをすべくヴェツラールに來たゲーテはロッテと知り合う。小説の中でも描かれているように、幼い弟妹たちに取り囲まれて、パンを切ってやっている情景やその後の舞踏会でダンスに熱中するロッテの魅力に捕らえられてしまった上に、彼女とその婚約者ケストナーにすっかり信頼され、親しくもてなされて、我を忘れてしまうまでになる。小説では最後の、死の前夜にされているが、現実には8月13日にただ一度だけ木いちご畑の中で、自分を抑えきれず、彼女にキスをしてしまう。ロッテはすぐにこのことをケストナーに打ち明け、もっと冷たく対応することが二人の間で取決められる。ゲーテはロッテに叱られ、友情以上のものを自分から期待してもらっては困ると言い渡される。しかしゲーテはこの情熱の進行する最中に、全く予想もされないような一面

を示すのである。つまりシュタイガーのいう「ひそかに用意された堅固な土台を持った不動の精神」が、ゲーテの中にしっかりと根を下ろしつつあることが窺われるヘルダー宛の書簡が、7月10日頃に出されているのである。

これはかなり長い書簡で、『ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン』の初稿を読んで、「君にかかってはシェイクスピアも全く台無しにされる云々」というヘルダーの冷たい批評に対して、完全に同意して改稿を約束する終わりのくだりや、一緒に生活し、一層の啓発を受けたいと熱烈に願う部分等興味深い内容を含んでいる。しかしここで問題にしたいのは、若きゲーテにとって極めて重要であると思われる次のような部分である。つまりヘルダーからの消息が途絶えて以来、ひたすらゲーテはギリシャ人の研究をしていること、当初はホメロスに限定していたが、クセノフォンとプラトンに依って、ソクラテスを調べてみたが、これを作品化するのには自分にふさわしくないことに目覚め、たまたまテオクリトスとアナクレオンにぶつかり、ついにはピンダロスに心ひかれるものがあり、今もなお熱中している状況を報告している。ヘルダーは若きゲーテの浮ついた本性をよく嘲って、キツツキに譬えていたが、善き霊がついに彼のキツツキ的本性の根底を見つけだしたと、ピンダロスのネメア詩集八の中「自他を意のままにしうる」(ἐπιχρατεῖν δυνάσκει)という言葉でそれがはっきりしてきたことが示されている。

君が大胆に車中に立ち、四頭の新しい馬が狂暴に、無秩序に君の手綱さばきに後脚立ちになり、それらの力をあやつり、抜けだすものをこちらへ引き、棒立ちになるものを鞭打ってひき下ろし、或いは追い立て或いは御し、向きをかせ、鞭打ち、引き止めてはまた追い立て、ついに16本の脚すべてが歩調をあわせて目標に到達するとき、これこそが名人芸、自他のあるじであること(ἐπιχρατεῖν)、芸術上の妙技というものです。ところが私は至る所をさまよい、至る所を覗きこんでみても、手を出してみた所とてありません。手を出す、ひつつかむことがあらゆる名人芸の本質です。(18-173f.)

このピンダロスは戦車競技の勝者を讃える歌を数多く残しているが、ここに述べられているピンダロス流の戦車を御する術を手掛かりにゲーテが展開する認識は、ここヴェツラールにおいて得られたのである。そしてこの戦車の御者のイメージこそは、ボイトラーも指摘しているように(4-1070)、彼自身の生涯のための比喩としてここに初めて登場し、ゲーテの死の前年に完結する『詩と真実』第四部は、遙かピンダロスに由来する次の章句で締めくくられている。

もういい。やめてくれ。目に見えぬ精霊に鞭打たれたように、時の日の駒は、われわれの運命の軽車をひいてまっしぐらに駆けてゆく。われわれは勇をふるって、しっかり手綱を握りしめ、この岩、かしの断崖を避けて、右に左に、車を御して行くほかにすべはないのだ。それがどこへ行くか誰が知ろう。どこから来たのかさえ、ほとんど覚えてはいないのだ。(10-852)

小説前半のヴェルターをゲーテとみるならば、既にヴェツラールの夏を迎え、次第に激しくなっていくロッテへの情熱にゲーテは我を忘れそうになっていたはずである。しかしこれらの文言から、時としてアンビバレントな気持ちを抱きながら、偉大な先輩ヘルダーの導きの手を離すことなく、広大な精神の世界に遊ぶことによって、自己の芸術と生き方のこつをしっかりと学び取っていたことが窺われる。そしてその最初の証左が『若きヴェルターの悩み』であった。

第3章 自殺のモチーフと自然感情

この作品のための最も初期の、半ページ大の紙片（4-267）がヴァイマルのゲーテ・シラー文書館に残されている。『詩と真実』によれば、

ある日突然私はイェルーザレムの訃報に接し、世間であれこれ取り沙汰された直後に事件のきわめて正確で詳細な記事を読んだが、この瞬間に『ヴェルター』の構想が成り立った。全体が四方八方から結晶してきて、一個の塊となった。ちょうどそれは氷点に達している容器の水が、ほんのわずかな振動によって、ただちに固い氷に変わるのと同じだった。この珍しい収穫物をしっかりと把握し、これほど意義ぶかく、多様な内容の作品を自分の心にありありと思い描き、その部分部分をすべて書き上げることが、私にとってより一層重要なことであり・・・（10-639f.）

とあるが、「この珍しい収穫物」の最終場面に当たる部分、即ちヴェルターの自殺の道具となるピストルをロッテが使いの少年に手渡す情景と、ロッテと知り合った時、彼女の胸を飾っていたリボンを前にしての感懐がこの紙片には簡潔に書き留められている。『ファウスト』においても、まず最初に書かれたのが、一番作者の心にかかっていたグレーチェン悲劇であったように、『ヴェルター』もこのあたりから書かれたのであろう。そしてこの作品が世のセンセーションを引き起こした原因が、先ず主人公の自殺にあったことも紛れもない事実であった。ヴェルターが8月12日の書簡で、世俗の人びと一般を代表するようなケストナーを相手に、色々な例をあげながら、懸命に自殺を弁護するところがある。話のきっかけは、後に自分が用いることになろうなどとは予想もしないで、旅行用に借りようとした例のピストルのことからである。ヴェルターは議論に夢中になってつい大声で叫ぶ。

ねえ、君、どんな人間でも、人間は人間だぜ。少しばかりの分別を持っても、情熱が荒れ狂い、人間の限界ぎりぎりに追い詰められると、分別なんかほとんど、いや全然役に立たなくなってしまう。むしろ、——いや、これはまたにしよう。（4-313, 改訂稿4-429）

これは、少し前に水死体となって発見されたある少女の事件をヴェルターが語ったのに対し、アルベルトが反論したので、彼はこう叫んだのである。ボイトラーの調査によれば¹²⁾、この少女はゲーテの母の生家のすぐ近所の指物師の親方の娘で、アンナ・エリーザベト・シュテューバーといい、事件は執筆の4年前に起こっていて、丁度その時ゲーテは、ライプツィヒから帰っていた。父が一件書類の写しを作らせていて、それは今もゲーテ館の三階の帝室顧問官の書庫にある。『ウル・ファウスト』成立の陰に、刑死したズザンナ・マルガレータ・ブラント事件の書類があったのと同じ事情である¹³⁾。自殺したこの娘の事件は、この小説の結末を暗示する伏線の一つとして、若きゲーテの分身たるヴェルターが、熱烈に展開する自殺弁護の論拠に使われているのである。しかし、小説末尾の印象的な文章が示しているように、動機の如何を問わず、自殺を罪悪とするキリスト教の世界にあっては、自殺したヴェルターに付き添う牧師は一人としていなかったのである。

明治初期の『文学界』と同世代の人々は、この小説が持っていた強烈な感傷性に、所謂「ヴェルター熱」に感染したのだが、神経を衰弱させ、錯乱させるものを秘めたこの小説の持つ、極めて危険な自殺への賛美、自殺への誘いは、世の人々の恐怖と嫌悪的となる。晩年のゲーテの回想によれば、イタリア語の翻訳が出た直後、ミラノの本屋ではこの本が一冊も見えなくなってしまったという。それは主教が教区の僧侶に全部買占めさせたためであり、

『ヴェルター』はカトリック教徒にとっては悪書であると即刻見て取って、たちどころにそれを片づけてしまった手腕を、賞賛せざるをえなかったと、ゲーテは語っている。(24-337)

ところで、この小説が出たのは、フランス革命を目前にひかえ、ヨーロッパの市民社会では、貴族の支配する旧体制への不満が沸騰点に近づきつつあった時期であった。我々の主人公も生活上はかなりの余裕を持ち、教養と精神的自由は享受しているものの、知的能力を生かす場としては、せいぜい官僚として群小君主の宮廷で隷属的な役割を果たす位しかない。ヴェルターは自分の内部に「なお多くの別の力が眠っている」(4-387)ことを自覚しているが、それも隠さざるをえないと語っている。彼は決して革命家ではない。しかし、彼が貴族ばかりのパーティにうっかり紛れ込んで、追い出された事件は、彼の自殺の重大な一因として描かれていて、宿命的な世間の身分関係に対する激しい怒りは見紛がうべくもない。因襲と常識に対する軽蔑と怒り、文明への倦怠、感情の解放、自然への復帰の願い等が、当時の社会にみちあふれていた。そのエネルギーを解放したのはルソーであった。

この小論の結びとして、当時の流行思想であり、ルソーに淵源し、この作品の重要な構成要素の一つとなっている自然感情に触れてみたい。

改築前のゲーテの家の三階に「庭園の間」という部屋があった。窓辺に植物が置かれていたためにそう呼ばれていたのである。大きくなるにつれて、そこがゲーテの「一番好きな、もの悲しいとはいわぬまでも、憧れを誘う場所」(10-18)となる。ここからは見通すことも出来ないような広々としたいくつもの庭園や、市の外壁を越えて、マイン川右岸の船着き場、ヘーヒストまで続く美しい沃野が見渡せた。

夏にはいつもそこで私は学課の勉強をし、雷雨が来るのを待ち、窓がそちらへ向いていたので、沈んでゆく夕陽をあくことなく眺めた。同時に、隣家の人々が庭を歩いて、花の手入れをするのや、子供たちが戯れ、人々が集まって笑い興じているのが見えた。九柱戯の球がころがり、柱の倒れる音が聞こえた。こういったことが、早くから私のうちに孤独感と、そこから生じる憧れの気持ち呼び起こした。(10-18)

と、幼い頃の自然感情の目覚めを『詩と真実』第1章に記している。そして第5章では、奇妙な形で現れる幼い頃の自然の事物に対する探究心の例(10-132f.)がいくつか挙げられている。花卉が萼にどういう具合についているのかを見ようとして、花をちぎったり、羽が翼にどういう具合に生えているのかを観察しようとして、鳥の毛をむしったり、古い紡ぎ車といくつもの薬瓶を使って電気を起こそうとして失敗するといったたぐいの話である。生涯にわたり天文、気象、物理、化学、地質、鉱物、動物、植物といった自然科学の諸分野の研究を続け、進化論に寄与した間顎骨の発見、植物変態論や反ニュートンの色彩論等の業績を遺したゲーテは、やがて80才になろうとする頃、次のように語っている。

私にしても、もし自然科学で苦勞しなかったら、あるがままの人間を知らずに終わったにちがいない。ほかのことはどれをとっても、あんなに純粋な直観や思考ができる筈がないし、感覚や悟性の誤謬とか、性格の弱さ強さなどを見つけ出すこともできないよ。つまりすべてのものは、多かれ少なかれ、屈折しており、揺れ動いており、多かれ少なかれ、人の意のままになるものだ。しかし、自然は、けっして冗談というものを理解してくれない。自然は、つねに真実であり、つねにまじめであり、つねに厳しいものだ。自然はつねに正しく、もし過失や誤謬がありとすれば、犯人は人間だ。自然は生半可な人間を軽蔑し、ただ、力の充実した者、真実で純粋な者だけに服従して、秘密を打ち明ける。(24-315f.)

この『ヴェルター』に示された自然観を特に重要視した昭和の作家がいる。『チャタレー夫人』を訳し、晩年に『発掘』、『変容』といった作品で、性の地獄にのたうつ現代の男性たちを描き続けた伊藤整である。彼は改稿版によっているのであるが、この小説の自然観を『ヴェルター』の他の二つの要素、つまり「恋愛」と「階級制度への反感や貴族や勤め人の俗物根性への作者の反感」以上に重要視している。彼によれば、この小説の自然観は「美感から始まっているが、実は自然の優勝劣敗の法則を意識することから来る人間生存の不安感なのである。そして、いま私たちがこの作品を読むと、その第三の部分が今なお現代的又は永遠の意義をもって我々にせまることが感じられる」と述べてその『ヴェルター』論¹⁴⁾を締め括っている。小説の8月18日付け書簡には、二つの自然観が対比的に語られている。若者の自然に対する感じ方が、全く充実した豊かさを示すイメージにあふれた前半と、自然が創り出したものは、その周囲にあるものも、自分自身も破滅させずにはおかないという自然界の実相を告げる後半である。シュタイガーは、この両者の間には中間休止として注釈は何もほどこされていない、ヴェルターは事態の急変について明確な認識を持っていない、帰ってきたアルベルトの存在が直接感じられるようになった事情が語られてしかるべきであろうと断じている¹⁵⁾。伊藤整は、この8月18日の書簡を読んだだけでは、直接この恋愛に関係がないことのように見えると、指摘している。そして、農家の下男は女主人に愛着したために殺人を犯し、ロッテの父のもとで秘書をしていた青年は、ロッテに愛着して気が狂う。ヴェルター自身もその愛着のために自殺しなければならなくなる、とたたみかけて、

「心なき散歩のあゆみに、われらは数千の可憐な虫の命をうばう」という生命の相喰む姿は、実はこの恋愛小説の奥を流れている強烈な思想なのだ。その思想は客観的なものであるから、作者がじかに作中で述べず、単に外界に見る自然界の生命の戦いの相を理解したという形で、ここに挿入されている。だが、ゲートその人の生命観はここにあり、それが、巨大な自然法則の実在を感じさせて、この作品に対するバックをなしていると考えることができるであろう。

しかし、この作品にじかに近づく読者に対しては一見無関係な思想と見える書き方であるから、構成的にはここに挿入したのは成功とは言われないうように考えられる。主人公の敗北感が強まった自殺直前の辺にこれを挿入した方が、印象はもっと全体に働いて強烈なものとなったかもしれない。

としている。自然淘汰や生存競争を人間社会の普遍的な原理としてもてはやすのは、ダーウィン (Charles Darwin, 1809-82) の『種の起源』(1859)、或いはスペンサー (Herbert Spencer, 1820-1903) の『第一原理』(1860-62) 以後と一般には考えられている。しかし、そういう明確でまとまった形をとらずとも、こういった思想は、それ以前からの、深い時代的関心の流れの中で生まれた成果といえよう。この『ヴェルター』の長い思索的な書簡が示しているように、幼い頃から自然に親しみ、鋭い観察の末に得た、若きゲートの直観的な自然観、生命観のあらわれもまた、世紀末の生存競争や自然淘汰を原理とする、社会進化論に連なるものと考えられる。

そういう視点から見ると、愛においても熱中しやすく、それなりに誠実で正直ではあったが、シュトラースブルク時代以来、幾度かいいよとなると結婚による束縛を恐れて逃げ出すゲートは、そういう不実な男性を懲らしめる作品を幾つか作った。しかしヴェルターでは、女性もまたかなりのものであることがほのめかされている。男女間の交際の描き方は、勿論19世紀後半の暴露的なリアリズムの手法とは異なり、18世紀の時代の要請に従って、礼儀正しく、極めて慇懃なものであった。総じて理想主義の傾向は否定しがたく、性善説を

基調としている。

女性というものは、銀の皿で、そこへわれわれが金のりんごをのせるのだよ。女性についての私の考えは、現実の女性の姿から抽象したものではない。それは私に生まれつき備わっていたものだし、あるいはひとりでに私が抱くようになった考えなのだ。(24-299)

それにまた女性というものが、私たち近代人に残されていて、私たちの理想をそそぎこむための唯一の容器なのだ。男については何もすることがない。アキレウスとオデュッセウスという最も勇敢で賢明な男で、ホメロスがなにもかも片付けてしまった。(24-255)

といった言葉が老ゲーテの口から洩れたこともあった。しかし、これは必ずしも女性の姿を理想的な女性像に仕立て上げることは意味しない。現に『ヴェルター』では、

アルベルトが親切にしてくれるが、これは彼自身の気持ちのあらわれというより、ロッテの指金によるものだろう。こういうところのやり方が女たちはうまいし、またそうなるのが当然だ。二人の崇拜者を仲良くさせておけば、得をするのはもっぱら女性だ。めったにそうはいかないものだが。(4-304, 改訂稿4-420)

とヴェルターに語らせている。トーマス・マンはこの部分を「諧謔的な見所」とした上で¹⁶⁾、

ヴェルターの気持ちは、この頃まだ、いかに情熱のとりこになっているとはいえ、「女たち」一般の手管についてこのような快活な洞察をくだすことができる程度には自由である。

というコメントをつけている。またヴェルターの目の前で、ロッテが自分の甘い唇にカナリアの嘴を入れさせ、その後でヴェルターの口にも入れさせた後、パンくずを自分の口にくわえて小鳥に与える場面を指して、マンは、

その危うい愛らしさには、目をおおいたくなるようなところがあり、ヴェルターの情熱をかきたてる善良な若い女ロッテの、無邪気さをよそおった媚態の特性を描いている。

としている。ヴェルターならずとも、顔をそむけて思わず「そんなことまでしなくたって！」(4-462)と言いたくなるところである。マンは、そのほか農場の女主人の作男に対する態度や、ロッテが自分の友人で、ヴェルターにふさわしい人を検討するくだりなどを挙げて、この小説の「心理的につぼをおさえながら、あばいていくやり方」を説明している。伊藤整もヴェルターに用いられた巧みな手法の例として、ロッテが別れ際に「さようなら、愛するヴェルター！」と言って、うっかりヴェルターに対する自分の気持ちを相手に分からせる箇所から、数行を挙げている。

青木利夫記者によれば、生物学的に見ればこの小説の中で、ロッテは生命そのものであり、ヴェルターはその殉教者であった¹⁷⁾。ヴェッツラールの隣町にあるギーセン大学の鉱物専攻のレッシュ教授がまとめあげた『ロッテの血族たち』正続二巻によると、傷心のゲーテが去った翌年、ロッテはケストナーと結婚して、12人の子供をもうけた。教授は現代までの8世代、約300人の子孫のことを調査し、「子孫の集会」を企画した。この集まりは1953年1月11日、ロッテの生誕200年の日に、爆撃の修復なったロッテの家が再開されたのを機に始められたそうである。

老若，男女，役人，実業家，学者，高校生……。にぎやかに飲み，食い，音楽を合奏している記念写真は，先祖なるロッテの底しれぬ生命力を見せつけるようであった。

それにひきかえ，ゲーテはどうだったか。五人の子供のうち，長男だけが妻帯して，三人の子供をつくった。だが，ひとりとして結婚しないまま，血族は絶えてしまった。

テキスト

ゲーテの著作や日記，対話録，書簡等の底本としては下記のアルテミス版を用い，本文中の引用（訳文）にはその巻数とページ数を（10-649）の形で付記した。訳文については，潮出版の『ゲーテ全集』等から借用したが，多少変えさせてもらった所もある。Johann Wolfgang Goethe: Gedenkausgabe der Werke, Briefe und Gespräche. Hrsg. von Ernst Beutler. Zürich 1949.

注

- 1) 小牧健夫『峠』昭和35年 角川書店 240ページ
- 2) 星野慎一『ゲーテと鴎外』昭和50年 潮出版社 63ページ以下
『欧米作家と日本近代文学4 ドイツ篇』星野慎一「ゲーテ」昭和50年 教育出版センター 58ページ以下
鈴木重貞『ドイツ語の伝来』昭和50年 教育出版センター 128ページ
第一章をまとめるに当たってはほとんどこれら諸先輩や注7の島田謹二氏の労作によったことを記し，感謝申し上げたい。
- 3) 鴎外全集第22巻 昭和48年 岩波書店 513ページ（漢字は多少現代風に改めた箇所がある）
- 4) 鴎外全集第23巻『エルテルの訳者』236ページ
- 5) 塩田良平 明治の文学 昭和30年 河出書房 15ページ以下
- 6) 島崎藤村全集第14巻 昭和24年 新潮社 183ページ
- 7) 島田謹二『日本における外国文学』上 昭和50年（下 昭和51年）朝日新聞社
「第二部 翻訳文学の研究 第一章 森鴎外と『即興詩人』」257ページ以下
- 8) 島崎藤村全集第2巻 昭和24年 新潮社 164ページ以下
- 9) 佐藤春夫全集 第12巻 昭和45年 講談社 178ページ
- 10) 正宗白鳥「ゲーテ」『ゲーテ読本』潮出版社1982年所収 14ページ以下
- 11) Emil Staiger: Goethe. Band 1, 1749-1786. Zürich und Stuttgart 1964. S.168
三木正之他訳『ゲーテ 上』1981年 人文書院 133ページ。訳文は多少変えさせて頂いた。
- 12) Ernst Beutler: Essays um Goethe. Bremen 1957. S.111ff.
- 13) Ernst Beutler: ibid. S.87ff. Quelle 第24号（クヴェレ会，大阪，1970年）に拙訳（「嬰兒殺しの女——ウルファウスト成立のかげに」78-92ページ）
- 14) 伊藤整全集第17巻 昭和48年 新潮社 491-501ページ，『ゲーテ読本』にも収録されている。（104-113ページ）（初出：講座・文学の創造と鑑賞 岩波書店 昭和29年）
- 15) Emil Staiger: ibid. S.168
- 16) Th. Mann: Gesammelte Werke in 13 Bänden. Frankfurt am Main 1974. Bd.9 S.651
- 17) 朝日新聞日曜版「世界名作の旅」1965年8月29日

Versuch über Goethes „Werther“

Teruyasu YAMATO

Seminar für Germanistik, Die Pädagogische Hochschule Osaka, Kashiwara 582, Japan

In der Meiji-Periode wurde Goethes "Werther" zuerst in der englischen Übersetzung und später im deutschen Text viel gelesen. Man hat den Roman aus den beiden Sprachen unterschiedlich ins Japanische übersetzt.

Hier sollen zunächst die Geschichte der frühen japanischen Übersetzungen und die der Akzeptierung des Romans in Japan untersucht werden.

In der zweiten Hälfte des Aufsatzes sollen dann Goethes Liebeserfahrungen, sein Schaffensprozeß und weiters Selbstmord und Naturgefühl in diesem Roman erörtert werden.

Die vorliegende Arbeit ist der überarbeitete Text eines von fünf Vorträgen, die von Professoren unserer Hochschule im Juli und August 1992, im Auftrag der Stadt Kashiwara, unter dem Gesamttitel "Wanderung in den Literaturen der Welt" in der Kashiwara-Kultur-Halle gehalten wurden.